

大阪にあったハンセン病療養所(1)

写真は大阪日日新聞 10月10日。標題を「伝えたい」と、大阪西淀川にあった外島保養院をレポートしている。関心のあるテーマなので紹介したい。

リードから一毎年のように台風、豪雨災害が多発しているが、かつて大阪市西淀川区の海拔ゼロ地帯の悪条件下にあったハンセン病療養所「外島保養院」では、1934年の室戸台風で壊滅的被害を受け、入所者ら196人が亡くなった。ハンセン病患者の強制隔離という国の誤った施策の中で偏見、差別が生まれ、この悲劇につながった。歴史的事実の風化が懸念される中、「外島保養院の歴史を残す会」の関係者や関西在住の元患者、支援者らは「元患者の尊厳回復」を願い活動を行っている。



1934年9月21日、近畿地方に室戸台風が上陸。外島保養院（大阪府主管、定員300人）は防波堤を越えて押し寄せた高波で一瞬にして壊滅的被害を受けた。避難が困難な重症者も多く、入所者597人のうち約3割の173人を含む職員、職員家族と施設拡張工事関係者ら196人の命が奪われた。

外島保養院は法律「癩予防ニ関スル件」（07年公布）に基づいて国が進めていたハンセン病患者の隔離・収容施設として、近畿をはじめ福井、石川、鳥取など近隣の2府10県の連立によって09年4月に開設。民家からほど遠い大阪湾（神崎川河口）に面した海拔ゼロの低湿地に位置し、各地から強制隔離された患者らは過酷な環境で生活を強いられた。26年に旧泉北郡への移転が計画されたが、ハンセン病回復者支援センターの原田恵子さんは「地元住民の反対があり、移転は断念せざるを得なくなり、現地での拡張となった」という。

その後、現地復興への反対もあり復興地選びは難航。患者自治会は府内での再建を望んだが実らず、38年に岡山県邑久郡邑久町（現瀬戸内市）の長島に「光明園」（のちの邑久光明園）として再建したため、大阪にあった外島保養院は姿を消した。保養院跡には邑久光明園の入所者自治会が「癩予防法」廃止の記念事業として外島保養院記念碑を97年11月に建立。毎年9月には邑久光明園の入所者自治会が元患者の尊厳回復を願い、追悼式典を開いている。

同センターの加藤めぐみさんは「患者の救済ではなく閉じ込める政策で、河口近くの保養院は人が住む環境ではなかった。同じ過ちを繰り返さないためにも、私たちは地域から追い出した事実を自覚する必要がある」と話す。

(2018年11月8日)